

「人間は考える葦である」—パスカルと聖書の知恵

フランスの哲学者（物理学者、数学者、キリスト教神学者）で、パスカルの定理などの発見でも知られるレーズ・パスカル（1623～1662）は「人間は考える葦である」※¹と言いました。

人間は自然の中で最も弱い存在、風に吹かれ、死に至ることさえある「葦」のような存在です。しかし、人間には「考える」という力が与えられており、この思索の力こそが、人間を尊い存在としています。

聖書もまた、人間の弱さと尊厳を描いています。詩編 8 編 4～5 節にはこうあります。「あなたの天を、あなたの指の業を／わたしは仰ぎます。月も、星も、あなたが配置なさったもの。そのあなたが御心に留めてくださるとは／人間は何ものなのでしょう。人の子は何ものなのでしょう／あなたが顧みてくださるとは。」

この言葉は、私たちが天地万物の中で取るに足らない存在であるにもかかわらず、神のかたちに造られ、尊い使命（召命）を託されていることを示しています。私たちは、「神の霊の息」を吹き込まれ（創世記 2:7）、永遠を思い、正義と愛を求める存在で、単なる「葦」ではありません。

初めに、神は天地を**創造された**（創世記 1:1）。

元始（はじめ）に神天地を**創造（つくり）たまへり**（文語訳[明治訳]舊約聖書 1953 年版）

読み方(右から左へ)

ハアレツ ヴェエツト ハーシャマイム エト エロヒーム(神) **パーラー** ペレシート(初めに)

בְּרֵאשִׁית בָּרָא אֱלֹהִים אֶת הַשָּׁמַיִם וְאֶת הָאָרֶץ

Θεόπνευστος (ギリシア語)
 =theópneustos, theh-op'-nyoo-stos
 =given by inspiration of God
 =神の靈感を受けて⇒神が息を吹き込まれる

創世記2:7
 主なる神は、**土(アダマ)の塵**で人(アダム)を形づくり、その鼻に**命の息**を吹き入れられた。人はこうして**生きる者**a living soul(文語訳:生霊)となった。
 →者: **נֶפֶשׁ** nephesh ネフェシュ=呼吸する生き物=Psyche プシュケー(ギリシア語)

神の息、命

つち(土)

しんによ(之繞)

→動きを表す

造語義①つくる
 ②はじめる、はじめる

くち(口)

造

©H.Taniguchi

しかし、その思索の力は、神から離れると傲慢となり、滅びへと向かいます。

コヘレトの言葉 7 章 29 節には、「ただし見よ、見いだしたことがある。神は人間をまっすぐに造られたが／人間は複雑な考え方をしたがる、ということ」とあります。

人はその知性をもって神を認める代わりに、自らを神のように振る舞おうとする傾向があります。

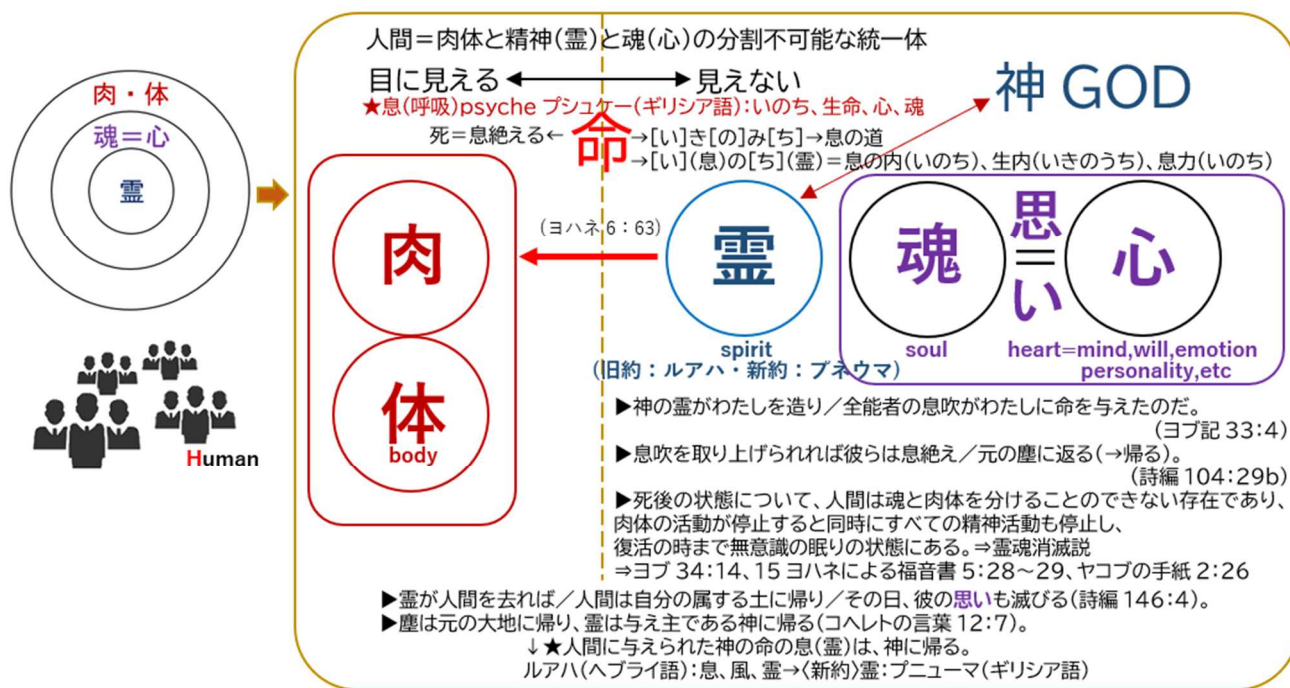
出エジプト記 5 章 2 節

ファラオは、「**主とは一体何者なのか**。どうして、その言うことをわたしが聞いて、イスラエルを去らせねばならないのか。**わたしは主など知らない**し、イスラエルを去らせはしない」と答えた。

だからこそ、パスカルは人間の弱さを見つめつつも、その思考が神を仰ぎ見るときにこそ、本当の意味で尊くなると信じていたのです。

神を思い、神の御心に叶った（→かなった、叶＝十字架＋思い）道を歩もうとする者は、その小さな「葦」に過ぎない存在が、天地を支える神とつながるといふ奇跡の中に生きるのです。

私たちもまた、自らの弱さを正直に受け入れつつ、神に目を向け、祈り、学び、愛することで、「考える葦」として神に用いられる者になりたいものです。



©H.Taniguchi

※1 : Man is but a reed, the most feeble thing in nature, but he is a thinking reed.

人間は自然のうちで最も弱い一本の葦にすぎない。しかし、それは考える葦である。

【参考】パスカル Pascal, Blaise 1623~1662

フランスの思想家、科学者、宗教家。中部フランスのクレルモ(現クレルモン＝フェラン)に生まれる。法服貴族の父エティエンヌはオーヴェルニュ地方の租税法院の副院長であったが、1631年に官を辞して一家でパリに移住し、科学者の集まりに参加してパスカルを教育した。16歳のとき、パスカルは、幾何学における「パスカルの定理」を明らかにした。その後、一家は父が徴税担当副総監になったのを機にルーアンに移住するが、彼は父の徴税業務を軽減する目的で歯車による計算機を発明し、また「トリチェリの真空」の報が伝えられると、実験によりこれを証明して「パスカルの原理」を確立した。24歳のとき、パスカルはポール・ロワイヤル派の宗教者に感化を受け、宗教的自覚を体験し、厳格な信仰へと導かれた(第一の回心)。その後パリに戻り社交界の教養人(オネットム)と交流したが、31歳のとき、神との出会いというべき宗教的体験を得て、信仰に身を捧げることを決意する(第二の回心)。以降、ポール・ロワイヤル運動の同調者となり、理論的指導者であるアントワヌ・アルノーがソルボンヌから告発されると、擁護のために論争書簡『プロヴァンシアル』(1656~1657)を執筆し、イエズス会の自由主義的な道德神学を批判した。この論争からキリスト教の真理を明らかにする「キリスト教護教論」の構想を持つが、1659年の初頭、重病に陥り1662年に死亡したため、著作は未刊に終わった。『パンセ』はこの著作の草稿を中心に編集された遺稿集である。